

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	オンデマンド授業を補完する取り組み：ライブ講座と学習支援動画を通して
Author(s)	山内, 勝弘; 山内, 優佳; 中川, 篤
Citation	広島外国語教育研究, 26 : 171 - 180
Issue Date	2023-03-01
DOI	
Self DOI	10.15027/53527
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053527
Right	Copyright (c) 2023 広島大学外国語教育研究センター
Relation	



オンデマンド授業を補完する取り組み

— ライブ講座と学習支援動画を通して —

山内 勝弘
山内 優佳
中川 篤

広島大学外国語教育研究センター

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の影響により、2020年度には多くの大学がオンライン授業を展開した。広島大学（以下、本学）も例外ではなく、必修英語科目は原則オンライン授業として実施された。とりわけ、リーディング・リスニングのいわゆる受容系技能を主に扱う授業（「コミュニケーション IA・IB（リーディング）」及び「コミュニケーション IIA・IIB（リスニング）」）では非同期型の授業方式（オンデマンド方式）を採用し、学部1年生のおよそ半数が受講した。

2021年度においても、ソーシャル・ディスタンス確保を目的として教室定員を半減化させることで従来よりも多くの教室が必要となり、教室数の制約から対面授業を行うことが困難だった。この問題を解決するために、複数の教員が担当している本授業ではオンライン授業が継続して行われ、オンデマンド方式で授業を進めた。特にオンデマンド方式を採用したのは、複数教員による共通の教材・進度・小テスト・試験の継続的な実施が理由にある。授業準備・運営の効率化や成績の公平性を担保するために、対面授業時でも行われていた協力体制をオンライン授業の環境下でも継続・強化するためにオンデマンド授業は適していた。

2021年度はオンデマンド方式の通常授業に加え、任意参加の同期型オンライン講座（ライブ方式）や動画配信を毎月行い、通常授業を補足するようにした（以下「補完型オンライン講座」と称する）。本稿ではこの補完型オンライン講座の概要を述べ、その可能性と課題、今後の展望について論じる。

2. 補完型オンライン講座導入の背景

2.1. オンデマンド授業の概要

授業には本学の学習支援システム（Learning Management System, LMS）である Blackboard Learn R9.1 (Bb9) を使用し、授業用のコースを作成した。4-5月に行われる第1タームは授業日に加えて2日間の受講期間を学生に与えたが、対面授業時と変わらない生活・学習リズムを保つために、6月開始の第2ターム以降では授業日の授業時間90分のみアクセスを許可した。教科書は『Power-Up Practice for the TOEIC® Listening and Reading Test』（英宝社）を使用し、予習として教科書の指定範囲を学習した上で授業に臨むことを学生に求めた。教科書に加え、英単語学習、英作文、ディクテーション、TOEIC を想定した問題演習という4種類のオンライン教材も課題とした。

Bb9上には、教科書等の教材に基づいて教員が作成した学習項目を元に、毎週1つの授業モジュールを構築した。学生は各学習項目を消化するごとに、次の項目が提示され、最終ページまで到達していくことで学習を進める。項目は以下の順序で提示された：(1) 単語テスト、(2) 教

科書の予習チェック、(3)教科書解説動画・音声の視聴、(4)解説の理解度チェック、(5)授業の振り返りである(高橋・榎田, 2021)。学生はこれらの学習を終えた後、提示された次週の予習範囲を確認し、次の授業の準備を行う。

2.2. オンデマンド授業の利点と課題

教育活動を展開していく上で、オンライン授業の利点と課題を理解することが必要である。オンデマンド授業の利点は、学生が場所や時間を選ばずに学習できる点にある。特に場所の面では、コロナ禍という非対面式が推奨されていた時期にはその特性が大きな利点となった。また、時間の面についても、自分のペースで学習が進められることは、特に年度当初の新しい環境に適応しなければならない多忙な時期には学生にとって有益であっただろう。

一方で、オンライン授業にはいくつかの課題が挙げられる。文部科学省が大学生を対象にして行った調査(2021年実施、複数回答可)によると、「友人などと一緒に授業を受けられ」ないことを課題として挙げた学生の割合は53%で、「レポート等の課題が多かった」が50%、「質問等、相互のやりとりの機会がない・少ない」は44%、「対面授業よりも理解しにくい」は43%であった¹⁾。文部科学省は同調査の結果を踏まえ、オンライン授業の実施にあたっては学生の声を丁寧に聞き、教育の質向上を各大学に対して求めている(文部科学省, 2021)。これらの課題の中でも、特にコミュニケーションの不足や授業の理解度低下に関しては授業の工夫によって改善することができると考え、本授業ではオンライン授業開始と同時に授業外の時間で学生への対応を始めた。

2.3. 前年度の対応

オンライン授業開始に合わせて行った学生対応は表1の通りである。オンライン授業開始当初の2020年前期には、Bb9へ掲示板を設置するとともに、Microsoft Teams(以下 Teams)を介したオフィスアワーの利用を呼びかけた。しかし、これらの利用者は非常に少なかったために、前期のみでその提供を終了した。掲示板については他の学生に氏名が公表されること、オフィスアワーについては大学教員との距離感が不明だったことが原因で、利用が敬遠されたと考えられる。

表1 2020年度に行なったオンライン授業への対応

対応	掲示板	オフィスアワー	問い合わせフォーム	教科書質問箱
ツール	Bb9	Teams	収集: Forms 回答: 電子メール	収集: Forms 回答: Bb9
時期	2020前期	2020前期	2020前期～現在	2020後期
目的	個別の疑問・質問等の解消	授業内容に関する質問へ個別対応	授業内外のトラブルへ個別対応	教科書内容に関する情報の共有

掲示板やオフィスアワーの開始と同時期に、Microsoft Forms(以下 Forms)を使用した問い合わせフォームへのリンクもBb9上に設置した。問い合わせフォームの利用者は多く、2022年度現在も継続して設置している。システムトラブルによって単語テストの結果が0点になった学生が対応を求めるなど、年間で300件以上の問い合わせが寄せられる。これらのトラブルに対しては、授業担当の教員間で対応を協議し、担当者が電子メールで返信するかたちで対応した。これらの結果を電子的に蓄積することで、対応の効率化を図った(中川・鬼田, 2021)。問い合わせフォー

ムは盛況だったが、内容の大部分は上記のようなトラブルへの対応を求める問い合わせであり、英語に関する質問や学習内容・方法に関するものは非常に稀であった。また、英語や学習に関する問い合わせが来たとしても、それに対する回答を得られるのは問い合わせた学生に限定されるという課題もあった。そこで2020年後期には、履修生全員に対する情報共有を目的として、教科書内容について質問を収集・回答する教科書質問箱を設置した。

教科書質問箱には学生から教科書の解説動画・音声を視聴しても理解できなかった点に関してさらなる説明を求める質問が寄せられた。質問に対して2週間に1回の頻度で、授業担当者のうち1名が回答音声を作成してBb9へアップロードした。アップロードした音声は、設置した2ヶ月で計4回分になった。これにより、履修生全員に対して教科書内容を再度学習する機会を提供することができ、一定の双方向を担保することにもつながった。オンデマンド授業では、教員が用意したコンテンツを学生が視聴する一方的な学習になりがちだが、教科書質問箱を設置することで、学生から質問を得ることができ、さらにそれに回答するという双方向性が生まれた。このように教科書質問箱には一定の双方向性はあったものの、質問した学生が答えを得るまでに2週間待たなければならず、即時性に欠けるという問題があった。その上、アップロードした音声を聞いた学生の数が教員側から把握できないというシステム上の問題も残った。

このように、2020年度に行なったオンライン授業に対する学生への対応は一定の成果を見せたものの、学習の双方向性と即時性に欠けるという課題が残った。そこでこれらの課題を解決するために、2021年度では補完型オンライン講座を導入し、ライブ講座や動画配信を毎月行うことにした。次節では、前期に行なった補完型オンライン講座であるライブ講座について、その詳細を論じる。

3. 前期ライブ講座

3.1. 目的

ライブ講座を導入する目的は、講座に参加した受講者²⁾に対して、オンデマンド授業の受講時に生じた理解の不足を補償し、講座内で双方向的な学習の機会を担保することである。Bb9を通じて得られた学習データに基づいて、受講者が困難と感じる学習項目を把握し、オンデマンド授業の解説を補足し、受講者の理解促進を狙う。リアルタイムで学生の反応を伺い、質問へ対応することが可能となるため、教員・学生間の同時・双方向的な学習の促進を目指す。さらに、学生に対して教員の顔を見せることで、学生の心理的な不安の低減を図る。

3.2. 実施頻度・時間

ライブ講座はTeamsやZoomを使用して行った。参加する学生と準備・実施する教員の負担や教科書の進度を踏まえ、毎月1回のペースで前期に4回(毎ターム2回)開催した。時間に関しては、できる限り多くの学生が参加できるように平日夕方に1時間実施することとした。他の通常授業が開催されている時間帯ではあったが、学生の時間割を踏まえて最も多く学生が参加できる日をタームごとに設定した。

3.3. 出欠の扱いと受講者の募集

ライブ講座はオンデマンド式の通常授業で生まれた疑問点を解消することが目的の1つであったため、この講座に参加しない・できない場合でも成績に影響することはないよう、出席は任意

とした。受講者の募集にあたり、講座の開始2週間前に Bb9を通じて授業の履修生全員へ案内メールを送り、受講を希望した学生に対して、後日ライブ講座の参加 URL を送信した。なお、ライブ講座の受講希望者からは授業内容や英語学習に対する質問も事前に受け付け、ライブ講座開催時に回答することにした。

3.4. ライブ講座の詳細

ライブ講座は本稿の著者のうち2名が担当し、1回の講座で1名が指導した。両名とも英語教育を専門としている大学教員で、英語の指導歴は10年程度である。前述のように、講座は Zoom や Teams を使用して60分間行った。ここでは6月に実施した第3回のライブ講座を例に取り、その詳細を説明する（表2）。

最初に、司会者（共同の授業担当者の1名）により講座担当者の紹介が行われた。紹介の後、講座担当者からそれまでの出席回数や体調などに関して質問し、投票機能によって受講者から回答を得た。これはオンデマンド授業と異なり、意見を聞きながら講座を進める意図を受講者に伝えるために行った。また、講座実施に先立ち、チャットや音声を使用しての質問やリアクションボタンによる応答を積極的に行うことを受講者に奨励した。

次に、教科書を使用して、文法問題の補足説明を行った。受講者はオンデマンド授業を行った時点で、予習としてテキストの問題を自ら解答し、Bb9へ個人の解答を入力した上で、正誤のフィードバックを得、動画や音声による解説を視聴している。そこでライブ講座では、文法問題の中でも特に誤答が多かった問題として、正答率が60%に満たない問題を抽出し、選択した割合が高かった誤答と比較しながら説明を行った³⁾。複雑な文法事項については単なる問題の解説に留まらず、基本的な要点を復習してから解説することもあった。文法問題は各 Unit に10問あるが、この第3回においては Unit 5「助動詞」の4問と Unit 6「不定詞と動名詞」の4問を解説した。各 Unit の解説が終わるたびに受講者からの質問を収集し、得られた質問にはその場で回答することができた。また、リアクションボタンによる反応を求めることで、受講者の理解度を確認してから次の活動へと進んだ。

文法問題の次はリスニング問題を解説し、文法問題と同様、正答率が低かった難問について解説を加えた。この回では、応答問題（TOEIC Part 2に相当）の6問のうち3問について、スクリプトを確認しながら音声を流し、聞き取りにくい箇所を繰り返し再生して説明した。特に正答の根拠だけでなく、音の連結や弱音といったリスニングで躓きやすいポイントについても解説した。また、教科書にある対話文の True or False 問題については、「正解が T だと思ったらグッドボタン、F だと思ったらハートボタンを押してください」と指示を出し、受講者がリアクションボタンを押して選択した解答を示すことで講座への積極的な参加を促した。

教科書の解説が終わると、事前に寄せられていた相談に回答した。この回では「リスニングの学習方法がわからないから教えてほしい」という相談があったため、普段の授業でリスニングを復習する方法と、リスニング能力を高めるための日常的な学習方法に分けて教授した。具体的には、その日に行ったリスニング問題のスクリプトを受講者と同時に（ミュート状態で）音読したり、BBC Learning English などの学習教材を勧めたりして、授業内外で実践可能な学習方法を提示した。質問は多岐に渡り、スピーキング能力の訓練法や留学生の友人を作る方法について回答した回もあった。

最後に、英語に対する動機付けが高い受講者に対して更なるレベルアップの場について情報を

表2 ライブ講座の流れ（6月に実施した第3回を例にとって）

時間	講座の展開	内 容
0 (2)	導入 ・ 担当者の紹介 ・ 挨拶 ・ 受講者へのお願い	受講者に対して、司会が講座の担当者を紹介した。講座担当者が自己紹介と挨拶を行い、投票機能を使って担当者からの質問への回答を求めた。講座受講にあたり、積極的な参加を奨励した。
2 (23)	文法問題の補足説明 ・ 難問解説 (Unit 5-6から各4題) ・ 質問対応・理解確認	教科書の文法問題で誤りが多かった問題を解説した。各 Unit の解説終了後に時間を取り、その場で出た質問に答えた。その際、受講者が理解できたか確認するため、リアクションボタンで応答するよう求めた。
25 (22)	リスニング問題の補足説明 ・ 対話応答問題解説 (難問3題) ・ T/F 問題直し	対話応答問題はスクリプトを使用し、聞き取るポイントを解説した。対話文の T/F 問題ではリアクションボタンを使ってその場で解答するよう求めた。
47 (12)	事前の質問・相談へ対応 (リスニング学習法教授) ・ 問題の復習手順 ・ 日常の学習方法提示	事前に寄せられた英語の学習方法に関する相談に回答した。第3回ではリスニングの学習方法についての問い合わせが来ていたので、問題の復習手順を説明し、学習教材を紹介した。
59 (1)	まとめ ・ イベントの案内 ・ 挨拶	大学内の英語学習イベントを案内した。また、オンデマンド授業や期末試験に向けて激励した。

注. () 内は所要時間

提供するため、講座担当者らの所属部署が主催する英語学習イベントについて案内し、テストや授業への激励の言葉を送って講座を終えた。

3.5. 前期ライブ講座の申込者数

ここでは前期で行ったライブ講座について、その申込者数の変遷を示し、ライブ講座を行う意義を考察する。前期に行ったライブ講座の申込者数は表3の通りである。

表3 ライブ講座の申込者数の変遷と学習進度

時期	4月	5月	6月	7月
申込者数	46	76	14	17
学習進度	Unit1-2	Unit 3-4	Unit 5-6	Unit 7, 9

表を見ると、年度当初の2回（4月と5月）は40名以上の申し込みがあり、特に5月の講座には76名と多くの学生が申し込みを行った（実際の受講者はこの8割から9割程度であった）。2ヶ月でこのように多くの申込があったのは、受講者が年度当初に生じた学習に対する不安を解消しなかったためであると考えられる。5月に最も申し込みが多かったのは、当該のライブ講座が第1タームの試験日近くに開催され、受講者がテストに関する傾向や対策について情報を得ようとしたこ

とが原因と考えられる。しかし、テストに関する情報を提供することはライブ講座に出席できない学生への公平性を欠くことにつながりうるため、講座内では公開されている情報を改めて提供し、学習プリントの問題を利用して学習方法を提案するようにした。

6月に入ると申込者が14名にまで減少し、5月と比べると5分の1以下にまで減っている。7月も同数程度の申し込みであった。このように減少した理由としては、学習に対する不安が和らぎ、新しい環境に順応したために参加する必要性がなくなった学生が増えたことが考えられる。6月は第2タームの開始時期にあたり、学生は第1タームを終えて、学習開始から試験までのターム制の流れを経験した時期になる。オンデマンド授業での学習方法を身につけた学生が増え、教科書全16単元の3分の1にあたるUnit 5まで終わって学習の見通しが立った学生は、これ以上ライブ講座を受ける必要はないと判断したのではないかと考えられる。

ライブ講座の導入初期に多くの申込者がいたことを考慮すると、ライブ講座の有用性は学習初期に高まると考えられる。オンデマンド授業は一方的に授業が進み、学生の疑問点もそのままにされやすい。学習方法がわからない学生にとっては、ライブ講座はそのような疑問を解決してくれただけでなく、一つの道標として学習の目安が示される場となったのだろう。少なくとも初めて大学の授業や新しく始まる生活環境に慣れるまでは、その効果を学生は求めているのではないかと考えられる。それに加え、オンデマンド授業はいつでもどこでも受講できるという長所がある反面、学生は一人で受講することが多く、心理的な不安や孤独感を感じやすい。教員が生で話し、その場で質問に答えるという双方向性や即時性が、学生が持つ学習初期の不安や孤独感を低減させることに寄与できたのではないだろうか。

ライブ講座において、今後の展望を示すと以下ようになる。今回のライブ講座では教員と学生間の双方向性を重視したために行わなかったが、学生のみを小グループに振り分けるブレイクアウト機能を活用して学生同士の交流を促すことで、学習で不安や孤独感のさらなる低減につながることを期待される。新しい友人とのつながりを求め、より多くの学生がライブ講座に参加するかもしれない。また、ライブ講座の対象を絞ることで学習効果の向上が見込まれる。上級者を対象にすれば教科書の発展的な問題演習を行うことができ、初級者を対象にすれば基本的な文法事項の復習により多くの時間を費やすことができる。交互に開催するなど、レベルのバランスをとりながら長期的に実施していくといいだろう。

4. 後期の取り組み

これまで2021年度前期に行ったライブ講座について論じてきたが、ここでは後期の取り組みとして行った補完型オンライン講座について10月から時系列に説明する(表4)。

前期に申込者数が減少していったことを考慮し、10月のライブ講座では募集の段階で多くの学生が苦手意識を持つリスニングにテーマを絞って講座を実施する旨を書いて案内を出した。しかし、当日の受講者は2名であり⁴⁾、前期から続いた申込者の減少が続いた。この状況を踏まえて他の授業担当者らと協議した結果、翌月の11月の回を動画配信に切り替え、前年度に一定の成果が見られた教科書質問箱を動画配信形式(オンデマンド方式)で行うことに決めた。さらに、授業の履修生が12月と1月にTOEICを受験することを踏まえ、12月にはTOEICの傾向と対策についてライブ講座を行い、1月には同じテーマで学習支援動画を配信(オンデマンド方式)することに決めた。

11月の動画配信に向けて、10月中旬より、毎週履修生の一部(例:1週目は火曜午後のクラス、

2週目は金曜午前のクラス、等)を対象に「授業や英語学習に対する感想・質問」を求めるメールを配信し、Formsを用いて回答を得た。11月中旬時点で、回答が109件、そのうち質問や要望が47件あった。要望については、可能な範囲でその後のオンデマンド授業に反映した。補完型の学習支援動画においては、文法やリーディングに関する質問に回答し、リスニングの学習方法について解説した。動画を公開し、2週間程度で延べ76回の視聴があり、直近のライブ講座よりもアクセスが格段に増加したといえる。

12月は「TOEIC 対策準備講座」と題し、ライブ講座を実施した。授業の履修生は同年7月にオンライン TOEIC (IP) 受験の経験があり、1月に受験予定の形式はマーク式のテストであった。そのため、冒頭では、オンライン試験との違いを中心に、マーク形式試験の注意事項などの説明を取り入れた。その後、前述の「要望」にも多く挙げられたリスニングに焦点を当て、模擬問題に解答する時間を設けた。参加申込者は3名、実際の参加は1名となり、改めて、「ライブ方式離れ」を如実に表す結果となった。

1月は前回に続いて TOEIC について特集したが、より多くの学生がいつでも視聴できるよう、動画配信の形式を採用し、学習支援動画を作成した。動画は TOEIC が行われる週の始めに Bb9 上で公開し、多くの学生の目に触れるよう、オンデマンド授業の学習モジュールの最後に設置した。動画の長さが全部で30分を超えたため、視聴する際の負担を考慮して2つに分け、前編ではリスニングパート、後編では文法とリーディングパートについて傾向と対策を説明した。視聴数は前編が279回、後編が185回であった。これには短い時間しか視聴していない学生も含まれるだろうが、それでも年間で最も多くの学生が視聴した補完型オンライン講座となった。

後期の取り組みを概観すると、ライブ講座の受講者数よりも動画配信の視聴回数が多い結果となった。ライブ講座は前期の後半から減少していたが、後期になっても減少に歯止めがかからなかった。その一方で、11月と1月に実施した動画配信は、より多くの学生の目に触れることになった。同じ TOEIC を話題にしても、12月のライブ講座と1月の動画配信とではアクセスした学生数に大きな差が生じている。この点を踏まえると、授業が進み、学習習慣が安定した時期においては動画配信の方が多くの学生にとってアクセスしやすいと言えそうである。

表4 2021年度後期に実施した補完型オンライン講座

月	形式	内 容	受講者／視聴回数
10月	ライブ講座	リスニングの学習方法	2名
11月	動画配信	事前に収集した質問への回答集	76回
12月	ライブ講座	TOEIC の受け方	1名
1月	動画配信	TOEIC の傾向と対策 ・前編：リスニング ・後編：文法・リーディング	前編：279回 後編：185回

5. 補完型オンライン講座の成果と課題、教育的示唆

オンデマンド授業を補完するために、前期はライブ講座を、後期はライブ講座と動画配信を行った。これらの補完型オンライン講座によって、オンデマンド授業で残った疑問点やそこに欠けていた双方向性を補完し、一定の成果を挙げることができた。ライブ講座では高い即時性が見

られ、学生はその場で教員に質問して回答を得ることができ、教員は受講者の理解度や反応を確認しながら講座を進めることができた。ライブ講座は、教員・学生間でコミュニケーションを密にとりながら、オンデマンド授業で不足していた理解を補う場となった。学習支援動画の配信においては、事前に収集した質問に回答した動画を LMS 上にアップロードしておくことで、学生がいつでもどこでも動画を視聴する機会を提供することができた。結果として、多くの学生が学習支援動画を視聴した。いずれの形式においても、オンデマンド授業の課題を克服する手法として補完型オンライン講座は一定の成果があったと言える。

一方で、補完型オンライン講座にはいくつかの課題が生じた。まずライブ講座において人数の減少が続いたが、それを挽回するには至らなかった。学生が参加したくなるトピックを設定したり、ブレイクアウト機能を用いて学生同士の交流を促したりするなどの手立てが必要であった。また、担当者からの視点では通常授業に加えて教材の作成準備が必要となり、負担が増大した。2名の教員が分担してライブ講座の実施や動画の作成を担当したが、それでも通常授業に加えて30分から1時間話し続ける準備を行う負担は小さくなかった。

本実践から得られる教育的示唆は以下のとおりである。オンデマンド授業を補完する講座や動画を学生に提供する場合、時期や必要性を考慮した上で、形式や話題を選択する必要があるだろう。ライブ講座は授業開始時期の前半では学習を軌道に乗せたり、学習の不安を解消したりと一定の効果が期待される。しかし、安定した学習習慣が出来上がった学期後半ではライブ講座の効果が薄く、受講者も減少してくるため、時間が経つにつれて動画配信の形式を選択することも必要である。本実践では毎月1回1時間授業外でライブ講座を行ったが、授業外で時間を設定するのが難しい場合は、通常行うオンデマンド授業の代わりに時折ライブ授業を実施するといいたいだろう。それまでのオンデマンド授業で生じた疑問点について、学生からの質疑に応じることで、補完型オンライン講座と同程度の効果が期待できる。また、扱う話題に関しては、普段は学生が授業で躓くポイントや授業の中で浮かんだ疑問点について回答していくことを中心に取り扱い、時には TOEIC のような学生にとって必要性が高い話題について話すとも良いのではないかと。

最後に、本稿の限界点として学生からの視点が不足している点が挙げられる。本稿はライブ講座への申込者と受講者、及び学習支援動画の視聴者の数を元に議論を進めてきたが、これらの補完型オンライン講座では受講・視聴した学生へのアンケートやインタビューを行っていない。受講者や視聴者から満足度や改善点などを聞き、講座の方法や動画の内容に関してフィードバックが得られれば、学生からの視点を含めた議論ができ、同時により質の高い実践に繋がっただろう。

6. おわりに

本稿は2021年度の実践をまとめたものであるが、2022年度においても新型コロナウイルス感染拡大防止のために、オンライン授業を展開している大学は少なくないだろう。また、今後新たな感染症が蔓延する可能性も否定できない。オンデマンド授業によって多くの学生の学びを進めることができるが、その一方で、オンデマンド授業に馴染めず学習が遅れた学生に対して、不足した理解度を補填し、双方向性を担保する機会を提供する必要がある。教員がオンデマンド授業の動画を作成して終わるのではなく、学生の学び直しと教員・学生間のやりとりを行う場を設けることが学びを止めない手立ての一助になるのではないかと。

謝辞

本実践を先導し、運営・統率にご尽力いただいた榎田一路先生が2022年5月に逝去された。先生のおかげで「外国語教育メディア学会関西支部2021年度秋季研究大会」では著者らと共同で本実践の一部を発表することができた。ここに最大の感謝を込めて、謹んで哀悼の意を表する。

注

- 1) 同調査には「身体的疲労を感じた」という学生が44%いたことも報告されている。一方的に講義を聞き続けることによる影響だと推察されるが、本実践との関連は少ないと考え、本文中での言及は避けた。
- 2) 通常授業の「履修生」と区別して、ライブ授業に参加した学生を「受講者」と呼称する。
- 3) 問題の正答率はBb9にある「項目分析」機能によって確認できる。各選択肢の割合が表示されるため、受講者が何に躓いているのか分析した上で、解説することができる。
- 4) 受講したのは、英語学習に対して非常に意識が高い学生たちで、ライブ講座の後に海外派遣プログラムにも参加している。

参考文献

- 高橋有加・榎田一路（2021）。「広島大学教養教育英語科目の受容系クラスにおけるオンライン授業の概要」森田光宏・榎田一路（編）『コロナ禍の言語教育－広島大学外国語教育研究センターにおけるオンライン授業の実践』（pp.56-76）. 溪水社.
- 中川篤・鬼田崇作（2021）。「非同期型オンライン授業における問い合わせフォームの活用」森田光宏・榎田一路（編）『コロナ禍の言語教育－広島大学外国語教育研究センターにおけるオンライン授業の実践』（pp.129-148）. 溪水社.
- 文部科学省（2021）。「オンライン授業に係る制度と新型コロナウイルス感染症の影響による学生等の学生生活に関する調査」（2021年7月7日）

ABSTRACT

Complementary Lectures to On-Demand Classes: Through Live Lessons and Learning-Support Videos

Katsuhiro YAMAUCHI

Yuka YAMAUCHI

Atsushi NAKAGAWA

Institute for Foreign Language Research and Education

Hiroshima University

This paper reports the results of monthly online lectures implemented in 2021 to complement a regular on-demand course. The complementary lectures aimed to further students' understanding of regular-class content and secure interactive learning opportunities between instructors and students. In the lecture, instructors addressed and explained difficult questions from the coursebook and answered students' questions. Although we started with live online lessons in the first semester and high participation was observed, the number of participants decreased over time. Therefore, in addition to these lectures, we recorded learning-support videos in the second semester and broadcast them on the learning management system at our university, allowing all students to access them anytime from anywhere. Consequently, numerous students watched and made use of them in language learning. These complementary lectures seemed to assist students with their chances of relearning and interacting among themselves. Future research is required to conduct complementary classes by incorporating collaborative learning with a break-out function, targeting students' proficiency levels and collecting participants' responses.